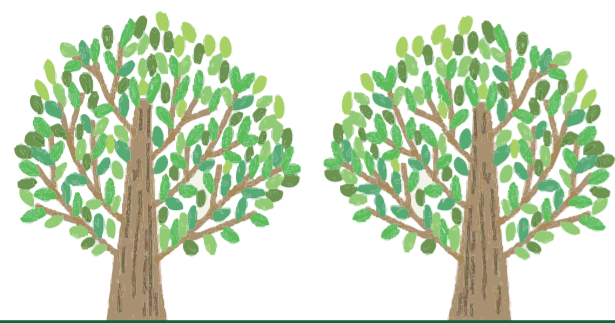


第10回 みえのホホフォトコンテスト



入賞作品展



写真の撮影を通じて森林や木に親しみ、その大切さを知っていただくことを目的に、県内在住または通学等している18歳以下の方を対象に「三重の森林」をテーマにした「みえの森フォトコンテスト」を毎年開催しています。第10回は県内各地から計280点の応募をいただき、この展示では入賞した28作品を展示しています。子どもたちの視点で捉えた三重の森林の風景をご覧ください。

審査員コメント



写真家
松原 豊氏

今回も多数の応募があり、様々な作品に出会うことができました。応募作品は身近な森林を撮影した写真が多かったように感じました。

小学生以下の部の最優秀作品は、木の幹のでこぼした特徴を面白く写真に表わしていました。光の当たり方も陰影がついて立体感を感じることができました。

中学生以上の部の最優秀作品は、森の広がりを感じることができるとともに空の青さと新緑の色で爽やかさも感じられる素晴らしい作品でした。

今回の応募作品の撮影が森林と接するきっかけとなり、身近な森林からもう少し森林の奥に踏み込むことで新たな被写体や感動と出会う体験につながっていったらいいと思います。

撮影機材面では、スマートフォンによる撮影が増えてきた印象があります。画素数のアップなどスマートフォンの機能が向上したことで、それによって撮影された作品のクオリティーも上がってきたように感じました。カメラ、スマートフォン、自分に合った撮影機材でこれからも「森林を見つめること」を続けてもらいたいです。



みえ森づくりサポートセンター
センター長
北野 信久

このコンテストも早いもので第10回となりました。子どもたちに森林へ出かけて行って、この地域の森林を五感で感じて親しんでほしい、森林の現状を見てほしい、そこから将来「みえ森と緑の県民税」の納税者として納税することの意義を理解して応援してほしい。特に人が植えた森林は長期にわたり手入れを続け、見守り続けなければならないということを知るきっかけにしてほしい、というのがこのコンテストを始めた狙いです。

応募作品も年々増えて、今回も280点の応募をいただきました。景観としての森



三重大学教育学部
教授
平山 大輔氏

今回でこのフォトコンテストも10回目となりました。節目の回にたくさんのすばらしい写真をお送りいただき、ありがとうございました。賞の数は限られていますので、毎年審査ではとても悩むのですが、今回はいつも以上に悩ましく、これまでで最も時間のかかった審査会となりました。

小学生以下の部では、例年のように最も多かったのは木や切り株などの「形の面白さ」がポイントとなるような作品でしたが、一方で谷津田とその周囲の丘陵地の森や溪畔林の姿等々、三重県で見られる特徴的な景観を写した作品も目立ちました。また森の中で見つけた動植物、森の中で活動する人を捉えたものなどもあり、多岐にわたりました。

中学生以上の部では、近年の特徴として高校生からの応募が多数ありました。小学生以下の部と異なり、「景観」を捉えた写真が多かったのですが、自然が創り出した躍動感ある森の景観、人の営みと森が織りなす景観、かつての人の営みが痕跡として残る森の景観など、それぞれに物語が感じられるような作品が印象に残りました。一方でキノコやヘビなど森の中での生きものとの出会いを切り取った作品も目立ちました。

みえの森フォトコンテストでは、みなさんに「カメラを持って森へ行こう!」と呼びかけていますが、その森とは決して定番の場所や多くの人がよく行くような森を意味しているわけではありません。みなさんが自分で「いいな」と思う森林で印象に残ったものを自由に撮ってもらえれば嬉しいです。

林だけでなく、林内に足を踏み入れて細部をじっくり見ているもの、美しいもの、形の面白いもの、初めて見たものなど、驚いたり感動したり、心が動いたものを素直に写した作品がたくさん集まりました。その中で、この地域ならではの田園と里山、特徴的な建て方の家々からなる集落と森林、温暖な三重の典型的な常緑広葉樹の植生など、この地域の気候風土に根差した風景や文化を表現した作品や郷土愛が感じられる作品もあって嬉しく思います。今後も、三重の気候風土の中で生活している人と森林や樹木、木材との関係性を表現した作品が増えていけばいいなと期待が膨らみます。

主催：三重県（みえ森づくりサポートセンター）

このフォトコンテストは、「みえ森と緑の県民税」を活用して実施しています。